

## 「動物を衛る 人を衛る」 —動物衛生研究の役割—

独立行政法人 農業技術研究機構  
動物衛生研究所長 清水 実嗣



動物衛生研究の役割は、家畜疾病の防除と衛生問題の改善を通じ、家畜生産の損耗防止と安全な畜産物の生産に貢献することにあります。現在、ヨーロッパでは二つの動物衛生問題が大きな社会問題となっています。一つは今年の2月に英国で発生した口蹄疫で、現在も発生が継続し終息の目途はたっていません。今回の発生は畜産業に大被害を与えたばかりでなく、総選挙の延期や観光産業の停滞など英国社会を大混乱に陥れました。8月13日現在、発生数は1,948件372万2千頭に達し、被害額は1兆数千億円に達すると見積もられています。一方、1986年に英国で端を発した牛海綿状脳症問題は、当初の予想に反して長期化し、公衆衛生上の懸念から今や世界的な社会問題となっています。ヨーロッパにおけるこれらの問題は、動物衛生研究の二大使命である家畜の損耗防止と畜産物の安全性確保に深く関わっており、健全な畜産業の振興に動物衛生が不可欠であることを如実に示すものとなりました。特に牛海綿状脳症は動物資源の再利用が原因であったことから、資源の有効利用と畜産の効率化に一石を投じることになりました。

ところで、昨年わが国でも92年ぶりに口蹄疫が発生しましたが、多くの関係者の努力により発生は4件にとどまり、早期に清浄化を達成することができました。また、わが国では牛海綿状脳症の発生もありません。しかし、家畜生産の大規模化と集約化にともなう環境悪化によって、日和見感染症等の防除の困難な疾病が問題化しています。また、新興感染症や再興感染症が多発する傾向にあるばかりでなく、海外病についても貿易の拡大によって侵入の危険性が増大するなど、わが国の家畜は多くの脅威に曝されています。地球の温暖化にともなう新しい疾病の発生も懸念されます。一方、腸管出血性大腸菌O-157やサルモネラによる食中毒、畜産環境と関連したクリプトスポリジウム症の多発、薬剤の残留や薬剤耐性菌問題、内分泌攪乱物質による環境汚染等を契機として、畜産物と畜産環境の安全性に対する関心が著しく高まっています。このように、社会や畜産業をめぐる状況の変化にともなう、最近の動物衛生問題は著しく多様化かつ複雑化しているといえます。これらの問題の多くは家畜生産を阻害するばかりでなく人の安全を脅かす大きな原因となるため、従来にも増して動物衛生研究の役割が重要となります。

このように動物衛生研究が益々重要となるなか、わが国唯一の専門研究機関である家畜衛生試験場は、平成13年4月1日に独立行政法人農業技術研究機構傘下の動物衛生研究所として新たに出発しました。新研究所の目的と責務、また社会が期待することは、今までと同様に家畜生産の損耗防止と安全な畜産物の生産に貢献する技術開発にあることはいまでもありません。新

研究所が社会の期待に応えるためには、現場に即した研究ニーズの的確な把握、自主性や独立性、柔軟な組織運営など独立行政法人の利点の活用、広範な連携協力関係の構築等を積極的に進め、研究活動の活性化を図らなければなりません。特に最近では環境が深く関わった衛生・安全性問題が増加しつつあることから、これからの研究では原因と宿主の研究に加え、環境要因など幅広い角度からの総合的研究が重要となります。新研究所は家畜衛生試験場の理念「動物を衛る、ヒトを衛る」を引き継ぎ、動物衛生と畜産環境に関わる基礎研究から疾病の診断・予防・治療法の開発に至るまで、新世紀に相応しい研究を実施し、社会の期待に応えなければならないと心を新たにしている。